

大学卒業後、東京都立駒込病院で感染症科医として臨床経験を積み、ハーバード公衆衛生大学院で公衆衛生学修士号を取得、新興・再興感染症対策に取り組む医師

やなぎさわ  
**柳澤**  
なおき  
**如樹**

国際医療協力局  
客員研究員  
医師



## ★略 歴

- 2003年 千葉大学医学部医学科卒業  
東京都立駒込病院 内科系臨床研修医
- 2007年 がん・感染症センター都立駒込病院 感染症科  
(～2016年：感染症科医長、院内感染対策室長)
- 2013年 東京女子医科大学第四内科学教室 (医学博士)
- 2016年 ハーバード公衆衛生大学院  
(～2020年：公衆衛生学修士、ポスドクトラル・リサーチフェロー、客員研究員)
- 2018年 国立国際医療研究センター 国際医療協力局 運営企画部 保健医療開発課
- 2019年 柳沢クリニック 院長、国立国際医療研究センター国際医療協力局客員研究員  
杏林大学医学部 非常勤講師、東邦大学医学部 非常勤講師

## ★現在の主な担当業務

- ◎2019年～ 杏林大学・東邦大学 医学部講義「輸入感染症」「性感染症」講義担当
- ◎2020年 第69回 日本感染症学会 東日本地方会総会学術集会 シンポジスト
- ◎2020年度 東京都児童館等職員研修「中堅児童厚生員等テーマ別研修」第4回 講師
- ◎2021年 東京都看護協会「安全なワクチン接種 実技講習」講師
- ◎2021年 ラジオNIKKEI感染症TODAY「クリニックの外来における感染対策の実際」
- ◎2021年 第70回 日本感染症学会 東日本地方会総会学術集会 シンポジスト (予定)
- ◎2021年度 東京都北区教育委員会「児童館職員研修 (館長研修)」講師

——柳澤さんが、医師を目指したきっかけを教えてください。

私の叔父が医師で、今でも現役で働いています。私が中学生の頃、体調を崩した時に、「この症状だったら3日後には良くなっているよ」と説明してくれて、経過がその通りになった時の体験は、とても印象に残っています。叔父が診療している姿を見て、自分もいつか同じように患者さんの力になれる医師になりたいと憧れを抱いていました。また、幼少期に米国に約10年住んでいた経験から、将来はおぼろげながら日本国内だけでなく、海外の方々と一緒に働くことができる仕事につきたいと考えていました。

———大学卒業後、柳澤さんは東京都立駒込病院に勤めていましたね。

当時としてはあまり一般的ではありませんでしたが、大学卒業後は研修先を母校ではなく、市中の一般病院を選択しました。東京都立駒込病院で初期臨床研修を開始しましたが、そこで青木眞先生と出会ったことが感染症科に進むきっかけとなりました。後期研修では駒込病院感染症科だけでなく、墨東病院救急救命センター、府中病院（現・多摩総合医療センター）呼吸器内科・ER、小笠原村母島診療所、駒込病院血液内科、米国ワシントン大学総合内科・感染症科で幅広く研修しました。米国での臨床研修や離島での診療経験は、都内の医療機関でだけ勤務していただいただけではわからなかったかもしれない、診療や医療システムの違いを経験できて、とても良い勉強になりました。

研修終了後は駒込病院感染症科のスタッフとなり、約10年間、臨床医としてたくさんの感染症患者さんの治療に従事しました。マラリアやデング熱などの熱帯感染症、HIVや梅毒などの性感染症、麻疹や風疹のように近年日本で大流行した感染症など、治療を経験した疾患は多岐にわたります。また、院内感染対策室で感染制御、渡航外来でワクチン接種、産業医として職員の健康管理なども行っていました。

研究では2012年から厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策事業）を受けることができ、「わが国のHIV感染者における慢性腎臓病の有病率と予後に関する研究」班の研究代表者を務めました。本研究で、平成30年度日本エイズ学会ECC山口メモリアルエイズ研究奨励賞を受賞しました。



平成30年度日本エイズ学会で

———国際保健医療協力の分野に入るきっかけについて、聞かせてください。

2015年にエボラウイルス病の疑いのある患者さんの主治医になった経験が、それまでの臨床医としてのキャリアを振り返る契機となりました。世界のある地域で発生した感染症が、瞬く間に国境を越えて広がるこの時代、臨床状況を的確かつ俯瞰的に捉え、感染症科医として更に成長するためには、公衆衛生学を体系的に学ぶ必要があると考えました。

ハーバード公衆衛生大学院への留学中は、感染症分野の知識だけでなく、人や社会の健康へアプローチするさまざまな学問分野を学習する機会に恵まれました。臨床医の時は意識しなかった健康の経済的、社会的、環境的要因についての学習は、とても新鮮でした。全ての授業をはっきりと覚えていますが、特に印象に残っているのは、Kawachi教授の“Society and Health”、Ryan教授の“Global Infectious Diseases”、Spengler教授の“Human Health and Global Climate Change”、Marcus教授の“Public Health Leadership Skills”です。



ハーバード公衆衛生大学院卒業式。同期の仲間と

授業そのものも楽しかったですが、留学中で特に印象に残っているのが、同期の日本人と一緒に、厚生労働省や医療・研究機関の第一線で活躍する方々とお会いし、日本の医療政策や母子保健の現状などについて見識を深めるための「ジャパン・トリップ」を企画したことです。専門分野が異なる臨床医だけでなく、厚生労働省やJICAなどから留学している仲間たちとトリップを成功させるため毎日議論したことで、これまで強く意識していなかった日本のヘルスケアシステムやグローバルヘルスについて興味を持つようになりました。

たくさんの素晴らしい仲間にも恵まれて、卒業できました。

このときの様子は、ヨミドクターに取材いただきました。以下のリンクから、記事を読んでいただくことができます。

[https://yomidr.yomiuri.co.jp/article/20161220-OYTET50009/?catname=archives\\_bostondayor](https://yomidr.yomiuri.co.jp/article/20161220-OYTET50009/?catname=archives_bostondayor)

### ————国際医療協力局に入職したのは、何故ですか。

留学後の進路について考えていたとき、このまま臨床や臨床研究に戻ることも考えましたが、せっかく公衆衛生を勉強したのだから、パブリックヘルスについて実践できる所に行きたいと思うようになりました。そんな時ちょうど、国際医療協力局のことを人づてに知りました。国際医療協力局のホームページで、これまで協力局が実践してきたことやミッションを見て、とても共感しました。私は、これまで日本で培った感染症医としての臨床経験と、公衆衛生大学院で得た知識とネットワークを活かせる職場だと考えました。またこれまでは、主に日本と米国での経験しかありませんでしたが、協力局では違った経験が積めることにも魅力を感じました。国際保健医療協力に携わり、開発途上国の保健医療分野の課題や、その国全体の公衆衛生の向上に取り組むことは、グローバルな世界では最終的に日本のプラスになると思いました。

### ————国際医療協力局で、これからどのような仕事をしたいと思っていますか？

国際医療協力局では毎日新しい経験をさせていただいています。入局してから日は浅いですが、これまで国外からの研修員と一緒に医療関連感染対策研修、ベトナム社会主義共和国で保健医療システムを学ぶフィールド研修、世界保健機関西太平洋地域委員会に日本政府代表団の一員として参加する機会をいただきました。新しい経験を積みながら、これからも新興・再興感染症対策に取り組みたいです。

感染症対策は一つの国で解決できるものではなく、さまざまな援助機関や国際機関と協調する必要があります。協力局での経験は、自分のキャリアにとって大きなものになると確信しています。現在、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた感染症対策の研究班の代表者として研究を継続しており、これまでに以上に成果を上げていきたいと考えています。



医療関連感染対策研修で研修員の皆さんと



ベトナム保健医療システムフィールド研修の修了式



フィリピン・マニラのWHO西太平洋地域事務局にて  
協力局の同僚と

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

私自身、“国際医療協力とは何か？”ということ勉強している毎日を送っています。ただ、国際医療協力そのものが時代と共に急激に変化しているため、異なるバックグラウンドを持つ人が集まり、議論することは大事だと考えています。臨床とは違った視野から、人の健康を見ることはとても重要だと思います。協力局では外部にもオープンになっている勉強会や研修を多く開催していますので、興味がある方は一度参加してみてくださいはいかがでしょうか。



ありがとうございました。

2018年12月にこの原稿を書きましたが、その翌月に私が尊敬していた叔父が急逝いたしました。叔父は地域の皆様から大変慕われていたため、私は悩んだ末に叔父のクリニックを継ぐことを決めました。開業当初はこれまでとは全く違う環境で戸惑うことも多かったのですが、これまで都立駒込病院感染症科、東京女子医科大学、ハーバード公衆衛生大学院、国立国際医療研究センター国際医療協力局で、臨床・研究・公衆衛生・国際協力で様々なことを経験したことがとても役に立っています。そして、地域からもできる「国際協力」があることにも気づくことができました。

引き続き、これまでの経験を活かし、「個人の健康」「皆様の健康」に尽力していきたいと思っております。